

種文学賞四月 最優秀作品 (作者 新中学二年生女子)

(これまでのあらすじ)

高校生の瑠夏は卓球部。中学生の時から負け知らずだったが、先月の全国大会で同じ高校生の菜々穂に負けて瑠夏は落ち込む。そんな瑠夏を励まそうと妹の鈴香は瑠夏をショッピングセンターへ連れて行く。

瑠夏はずっと欲しかった文具セットが買えて、今までの落ち込みが嘘のようにはしゃいでいる。そんな瑠夏を見ると鈴香も嬉しくなった。次は本屋に行こうかな、と思い後ろを振り向いた瞬間、鈴香の背筋が凍った。本屋の前に菜々穂がいたのだ。

「…ねえ、あそこ」

文具セットに入っていたシャーペンをカチカチして瑠夏は気付かない。鈴香はため息をついてから、瑠夏の手からシャーペンをとった。

「ん、どうしたの？」

瑠夏はシャーペンを取られて少しおどろいたが、鈴香は構わず、再び文具店の中に入らせた。文具店から出ようとした瑠夏は通路をはさんだ反対側に菜々穂がいるのに気付く。驚いた瑠夏は文具セットを落として周囲の目が集まる。そしてワテンポ遅れて瑠夏が声を絞りだした。

「うわっ、よりもよってどうしてここに？」

瑠夏の全身は小刻みに震えてどうどうしゃがみこんだ。周囲の人達のヒソヒソ話が嫌でも耳に入ってくる。今の鈴香には出来ることがないのでそんな自分に嫌気がさす。泣きそうになりつつ、鈴香は声をかけた。

「知らないわよ。見られたらまずいわ。どうしましょう」

鈴香の泣きそうな声に気付いたのか、瑠夏はハッと我にかえると握っていた館内マップを見て、隣のカフェを指差した。

「と、とりあえずあの店に入ろう」

文具セットを拾って慌てて店に入った二人は高いパフェを頼んでしまったがそれどころではない。菜々穂に見つからないように二人揃って身を固くしていた。

「ふう、通りすぎていったな」

瑠夏が普段通りの笑顔で言ったので鈴香は安心した。

「気付かれないで良かった。どうなることかと思ったわ」

と、鈴香も笑いながら返す。そこへ、先程頼んだフルーツがごちやごちや乗ったパフェが来た。

入選作品①

(作者 新中学一年生男子)

(これまでのあらすじ)

花子はおつかいを頼まれたが、ついつい南の家で夕方まですごしてしまった。お母さんに叱られそうなので南とおつかいをし、家に帰って一緒にあやまって少しでもお母さんの怒りをしずめようと南の家を出た。

ショッピングセンターのおそうざいコーナーはいつもそして今日も大はんじょうだった。そんな中、チラッとお母さんの顔が見えたような気がする。なにしろこのはんじょうぶりだ。似ている顔の人はいるかもしれない。しかし、

「…ねえ、あそこ」

南が小さな声で言った。私は自分の考えがあたっていないことを願ってふりかえった。

「ん、どうしたの？」

まさかの予想的中だった。

「うわっ、よりもよってどうしてここに？」

一しゅん目が合ったような気がする。

「知らないわよ。見られたらまずいわ。どうしましょう」

私はすぐにスーパ―から出て、一番近くにあった八百屋を見て言った。

「と、とりあえずあの店に入ろう」

急いで私たちは八百屋の中に入った。お母さんが近づいてくる。どうやら私たちに気付いたらしい。近づいてくるにつれ自分の心ぞうがバクバク言っているのが聞こえるようになった。数分、いや私たちに

とっては永遠の時が流れた。だが、お母さんは私たちに気付いていなかったようだ。そのまま心配そうな顔をして去って行った。

「ふう、通りすぎて行ったな」

あんど感にあふれた顔で南が言った。

「気付かれないで良かった。どうなることかと思ったわ」

とは言ったものの本当はどちらがよかったのか分からない。私たちを探していたからお母さんはあんなにも心配そうな顔をしていたのかもしれない。そう考えると目が合ったときに謝っておけばお母さんの心配はなくなったのかもしれないと自分の家に帰りながら思うのだった。

入選作品②

(作者 新小学五年生男子)

(これまでのあらすじ)

仲良しの健太とおおいが遊んでいるとらんぼうな波本にぶつかり、水たまりの水をかけてしまった。すると波本はおこり、おいかけてきた。二人はあわててにげだした。そして人の多い花園横丁ににげこんできた。

花園横丁ににげこんだ二人は、一番人が多く、目立ちにくい所に入った。そこはいろいろなレストラン・スーパー・ショッピングモール・ゲームショップ…など何から何まであった。健太とおおいは、こんな都会のような店がたくさんある所に来たことがあまりなかったので、よけいきんちょうした。しかし、色々な店をながめているうちに夢中になっていき、そのきんちょうもすっかり忘れてしまった。どれくらい時間がたったかもわからなかった。ふとおおいがぎやかになっている方をみると波本がフンブンしながらこちらをさがしていた。急に心ぞうの動きが速まった。

「…ねえ、あそこ」

おおいは、おばけを見たかのような顔で健太のかたをゆすった。

「ん、どうしたの？」

健太の目は、まだとても輝いていた。最初はきよんとしていたが、おおいのふるえる指の先をたどってやっとわかった。

「うわっ、よりもよってどうしてここに？」

健太は夢からさめたかのようにまったく別の目になった。

「知らないわよ。見られたらまずいわ。どうしましょう」

おおいがこわがっているのがよくわかった。声がふるえているのだ。

「と、とりあえずあの店に入ろう」

健太の指した先は、どうやらきつき店みたいだ。二人は、お店の名前も注意どころもみないで飛びこんだ。そして、まさきに目に入ったものは、「高校生以下のご来店はごえんりょください。」というかんばんだった。あおいはあせった。今すぐ出るべきか…それとも立ち去るまでまつしかないのか…と。健太を見るとのんきにくびをかしげていた。いみがわかっていないかのように…。あおいは健太の頭をおもいきりはたいした。健太はようやく意味がわかったようだった。二人は、ともかくそこにかくれることにした。健太とあおいの思っていることはそれぞれ同じであろう。「早くどこかにいきますように」だ。しかし波本は、よけい近よってきた。そしてなんと店にまで入ってきたのである。健太はおもわずさけびそうになった。だが波本は、お店の人と話した後、どこかへ行ってしまった。二人はホッとした。全身の力がぬけて立ち上がれなくなるくらいに。

「ふう、通りすぎて行ったな」

健太は思わずためいきをついた。時計を見るとまだ店に入って三分もたっていないかった。もっとたっていたと思ったのに…。

「気付かれないで良かった。どうなることかと思ったわ」

二人は店をでた。お店をふりかえるとなんと「コーヒー波本」とかいてあった。二人は笑いながらタヤけにそまる道を歩いていった。

入選作品③

(作者 新小学四年生女子)

(これまでのあらすじ)

幼馴染みの優花と暖人は、同じテニススクールにかよっている。今日は、そのテニスのテストだったから、二人は早い時間に行って、練習した。時間がたって、テストの十分前になったので、二人はそれぞれの部屋に行った。

あと三分でテストが始まるから二人は部屋を出て、コートにむかった。いつも練習していたコートは二組しか試合ができなかったけれど、今のコートはしきいがとり外されて、いつもの二倍の大きさになっていた。大きくなったコートを見たあと、優花が入場口に戻ってみたら、いつの間にか戻っていた暖人がルールやコツなどを白紙一面に書いていた。

「何してんの?」

と優花は聞いてみた。すると暖人が

「いや、これで緊張がほぐれるかなと思って」

と言った。それがなぜしているのか分からなくておもしろかったので、思わず

「ふふ」

と笑ってしまった。その時、声が大きかったのかわからないが、まわりからも笑っている声がきこえてきた。優花はそんなことも気にせず、続けて

「あんたらしいわ」

とみんなにきこえるかきこえないかぐらいの声で言った。そうしたら暖人が

「笑うなよ」

と、はずかしがっているようなおこっているような声で言った。でも、優花はルールなどを思いうかべたり書いたりして緊張をほぐすこともいい考え方だなどと思って

「…私もやってみようかな」
と、つぶやいた。